

4

「グリソン鞘」と「グリソン被膜」をめぐる

佐藤 裕

九州大学医学部医学歴史館

数ある肝臓に関係する解剖学上の冠名用語のなかで、よく知られているものに肝内に進入する脈管群すなわち胆管、門脈と肝動脈を取り巻く「グリソン鞘 (Glisson's sheath)」と、肝臓表面を被覆している「グリソン被膜 (Glisson's capsule)」がある。これらの冠名の名祖は、1628年にハーヴェイ (William Harvey: 1578–1657) が唱えた「血液循環説」をいち早く受容し、1654年に肝臓という単一の臓器を扱った「Anatomia hepatis」を著したイギリスの医学者グリソン (Francis Glisson: 1597–1677) である。同著において「肝臓に流入する門脈血流と肝動脈血流が肝静脈から下大静脈を経て心臓に還流する」ことを解剖学的に示すとともに、古来西欧の医学界において金科玉条として信じられてきた「肝臓は血液産生の場である、すなわち腸管を産し脾臓を介して肝臓に送られた乳糜 (今日のリンパ液) から肝臓において血液が産生される」という「ガレヌス学説」の誤謬を正したことに大きな意義があったのであり、「グリソン鞘」や「グリソン被膜」はむしろ副次的なものといえる。近年これら「グリソン鞘」や「グリソン被膜」の由来に異を唱えたのが、現在肝臓外科の領域で受け入れられている「肝臓の区域」という概念を提唱したクイノー (Claude Couinaud: 1922–2008) である。クイノーは「Surgical Anatomy of the Liver Revisited (1989)」において、いち早くハーヴェイの「血液循環説 (1628)」を受容したオランダ・ライデン大学のワレウス (Johannes Walaeus: 1604–1649) が、弟子筋のバルトリン (Thomas Bartholin: 1616–1680) に宛てた書簡 (The Epistles of Johannes Walaeus concerning Motion of the Chyle and the Blood to Thomas Bartholinus, the son of Casper Bartholinus) において、1642年に同様の構造の存在を示していたことから同鞘様構造を「ワレウス鞘」と、また「グリソン被膜」に関しては、聴診器を発明したラエネック (Rene Laennec: 1781–1826) が、オテル・デュー (Hotel Dieu) の主任外科医で、当時医学校において外科解剖学を講じていたデュピュイトラン (Guillaume Dupuytren: 1777–1835) に宛てた書簡 (Lettre sur des tuniques qui enveloppent certains visceres et fournissent des gaines membraneuses a leurs vaisseaux; 1803) の中の記述に基づいて、肝固有の「ラエネック被膜」と呼ぶべきと主張した。英語訳を参照しながらこの書簡を通読してみるとラエネックは「Anatomia hepatis」を十分に読み込んだようで、「Glisson decouvrit que la veine porte, et les vaisseaux biliaires qui l'accompagnent constamment, sont revetus par une enveloppe commune, a laquelle il donna le nom de capsule, et qu'il crut être produite par une partie du peritoine, enfoncée dans le tissu du foie.」としている。そして、デュピュイトラン宛ての書簡のタイトルを和訳すると「肝臓を被覆 (envelope) し、脈管群に鞘状膜 (フランス語: gaines membraneuse, 英語: membranous sheath) を供給する外皮 (tunic) について」となる。すなわち、ラエネックは、グリソンが「Capsule communis (共通被膜)」と名付けた脈管群をとりまく包膜状組織を、フランス語で「gaines membraneuse」すなわち「鞘状の膜」と言い換えたのである。本来、グリソンの「Anatomia hepatis」の記述に忠実に従うならば、同構造は「グリソン被膜」と呼ぶべきであろうが、今日使われている「グリソン鞘」という冠名の淵源はラエネックの「gaines membraneuse」にあると考えられる。さらに、文中には「tissu」を「membrane」と同じ意味で使っている箇所があり、これは「組織」を表わす言葉として「tissue」が用いられた最初と思われる。なお、歴史的には、顕微鏡を使うことなく「membrane (膜)」を今日の「組織」という概念を表わす言葉として提唱したのは、ラエネックとほぼ同世代のビシャール (Xavier Bichat: 1771–1802) であった。1799年ビシャールは「膜論」を著し、人体 (の諸器官) は21種の「膜」イコール「組織」からなり、この「組織」の変化が病気を引き起こすとした。